

博物館だより

No.205



令和5年12月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

博物館休館日カレンダー
2023年12月

日	月	火	水	木	金	土
26	27	28	29	30	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31	1	2	3	4	5	6

休館日 ※情報はR5.11.18現在

◆博物館NEWS

ふるさと遺産フェスタの「歴史たんけんウォーク」として、10月22日(日)、博物館を会場に「みやこ町ふるさと遺産フェスタ」が開催され、午前中は、テーマを取り上げた堺利彦・葉山嘉樹ゆかりの地を歩く「歴史たんけんウォーク」が行われました。

二人が学んだ育徳館周辺には、彼らの著作でも紹介されたゆかりの地や施設が今も息づいていて、二人の足跡をたどることができました。



▲見学地の一つ堺利彦農民労働学校跡

◆講座・教室・催し物ガイド

12月の歴史講座

- 【漢詩紀行講座】
12月2日(土) 9時30分～
 - 【古文書講座】
12月9日(土) 10時～
 - 【古典かな講座】
12月16日(土) 9時30分～
 - 【みやこ学講座】
12月23日(土) 10時～
- ※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途通知します。

年末臨時休館のお知らせ

博物館では館内整理と燻蒸作業のため、臨時休館します。期間中の博物館および文化財業務に関することは、左記へお問合せ下さい。なお、新年は1月4日(木)から開館いたします。

- ・臨時休館の期間
12月24日(日)～12月28日(木)
- ※なお、12/29は年末年始休館です
- ・臨時休館中の問合せ先
☎33-1040(図書館)

ふるさと遺産フェスタの「歴史文化カレッジ」 堺利彦と葉山嘉樹をテーマに講演会

午後は歴史文化カレッジが開かれ、堺利彦をテーマとした講演会と、葉山嘉樹の「里帰り資料」速報展が行われました。

講演会では堺利彦の顕彰・研究を続けている塚本領氏(二人顕彰会)・山泉進氏(明治大学名誉教授)から、世界が流動化する現在、堺が主張した非戦論はいささかも色褪せていないとの談話が披露されました。



▲山泉進先生による文化講演「堺利彦と現代」

絵画コンクール 最優秀賞受賞者決定!

例年、町内外の小・中学生の児童・生徒を対象に実施している「わたしの町の過去・現在・未来絵画コンクール」ですが、今年も一〇五一点の応募をいただきました。審査員による厳正な審査の結果、選ばれた優秀賞6点を10月1日から博物館ホールに展示し、入館者による投票を行った結果、育徳館中学校3年生の平野心乃莉さんが描いた「古代の山城 御所ヶ谷神籠石」が最優秀賞に輝きました。

おめでとうございませう!



▲絵画コンクール最優秀賞受賞者 平野心乃莉さん



▲来館者による投票の様子

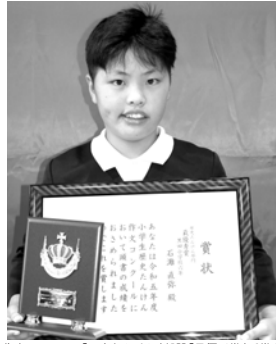


▲最優秀賞受賞作品「古代の山城 御所ヶ谷神籠石」

「小学生歴史たんけん作文コンクール」最優秀賞受賞者決定！

例年、町内外の小学生の児童を対象に実施している「小学生歴史たんけん作文コンクール」では、力作揃いの作品の中、「歴史たんけん」部門では、みやこ町立黒田小学校6年生の石灘直弥さんの「彦山豊前坊と求菩提山次郎坊」、「吉田兄弟物語」部門では、みやこ町立豊津小学校6年生の内野優愛さんの「私のイチオシ『吉田兄弟物語』」が見事、最優秀賞に輝きました。

おめでとうございます！



作文コンクール「歴史たんけん」部門「最優秀賞」受賞者 石灘直弥さん(みやこ町立黒田小学校6年生)

作文コンクール「歴史たんけん」部門「最優秀賞」受賞作品

彦山豊前坊と求菩提山次郎坊

黒田小学校 六年 石灘 直弥

舒明天皇九年二月(六三七)年、東から西へ大きな音をたてて流星が流れた。その音の人々は「流星の音だ」とか「地雷の音だ」とか言ったが、唐から帰国した僧の曼奈(まんな)が「流星ではない。これは天狗である。天狗の吠える音が雷に似ているだけだ」と言った。これは、日本で初めて天狗が「日本書紀」に登場した場面だ。ここでは天狗を「てんぐ」ではなく「あまつつきつね」と読んでいる。天狗は中国から伝わった。元々、中国では流星を意味するものだったが、天を駆ける犬の姿に見えて、天の狗とされた。僕は、この天狗が近くに祀られていると知って会いに行きた。そして天狗がいる場所が近くにありと知ってわくわくした。

ひとつめは、英彦山にある高住神社だ。ここには日本八大天狗の一人、彦山豊前坊が祀られている。日本八大天狗とは、江戸時代中期に書かれた「天狗経」に登場する、強い力を持つ四十八天狗の中でも、さらに強い力、神通力を持つ八人の天狗のことである。天狗は霊山に住んでいるので、山の名前と二緒にならう。京都府の愛宕山太郎坊、京都府の鞍馬山僧正坊、滋賀県の比良山治郎坊、長野県の飯綱三郎、神奈川県相模大山伯耆坊、奈良県の大峰前鬼坊、香川県白峰相模坊、そして福岡英彦山に住む彦山豊前坊のことである。天狗は三種類あつて鼻の高い「鼻高天狗」と、くちばしのある「カラス天狗」で、鼻高天狗は八大天狗、カラス天狗は小天狗と言われ八大天狗は全て大天狗である。

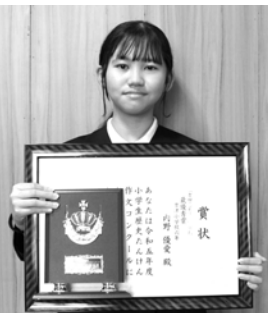
豊前坊のいる英彦山の高住神社に着くと、まず、天狗村と書かれた大きな杉の木があった。とても太くて上を見上げると、どんな大きな天狗でもとまれそうだった。神社の境内の中を見つめると、正面に大きな天狗の面が三つ、神棚に二つ、側面にもいくつかあった。どの天狗の面も、この世のすみずみまで見通せそうなく、大きく見開いた目と、長い鼻と、一文字に結んだ口で、こちをならみつけていた。僕は豊前坊に会えたようので、社務所の前に

「それが豊前坊ですか？」と、聞いた。社務所の方は「全部が豊前坊を表しているよ。」と、答えてくれた。石碑に豊前坊の説明があり、欲深く、おごり付けた人には、子供をさらったり、家に火を付けたりして、慈悲の鉄槌を下し心正し人には、願い事を遂げその身を守るのとあった。また、豊前坊は九州の天狗の棟梁格で、霊力が強く、天狗倒しという霊力を使い、その力とは、山奥で深夜に突然さまじい大きな音をたすことだ。英彦山ではこの天狗倒しとよく起き、豊前坊の霊力のあらわれとされているようだ。

次に僕は豊前市の求菩提山へ行った。求菩提山には次郎坊と呼ばれるカラス天狗が住んでいるそうだ。昔は次郎坊天狗

社という神社もあったそうだ。資料館で僕は、天狗と山伏との結びつきを感じた。山伏は超自然的な力「験力」を手に入れるために修行していた人たちで、里の人々には、すごい力を持つ山伏と天狗が重なって見えた。だから天狗は山伏の格好をしているのだ。その他にも僕は、求菩提山に伝わる神仏像や出土した物を見て、山伏の暮らしを知ることができた。

僕はこの二つの場所に行つて、今まで空想上の妖怪だと思つていた天狗が、神様として人々に信じられていたことを知った。そして悪い事も良い事もする天狗を面白く思った。英彦山も求菩提山も山伏が修行していた山だと知つて、これからはもつと行つてみたいと思う。そして二つの山から近くに住んでいる僕達の頭の上を妖怪であり神様でもある豊前坊や次郎坊が飛んでいく想像すると、心正しくつておこうと思う。



作文コンクール「吉田兄弟物語」部門「最優秀賞」受賞者 内野優愛さん(みやこ町立豊津小学校6年生)

作文コンクール「吉田兄弟物語」部門「最優秀賞」受賞作品

私のイチオシ「吉田兄弟物語」

豊津小学校 六年 内野 優愛

「お母さん、お父さん、みやこ町にはたくさん偉人がいるんだよ。今、私達が快適に暮らしているのは、私達のために努力をしてくれた昔の人たちのおかげなんだよ」

わたしは、夢中になってお母さんとお父さんに吉田兄弟のことについて話していました。みやこ町の人によって作られた二冊の本、「吉田兄弟物語」との出会いは、私の考え方が大きく変わるきっかけになりました。そうでなければ、きょう私は夢中になって吉田兄弟のことにつ

いて両親に話すようなことはしていません。そんな「吉田兄弟物語」という本の内容について紹介したいと思います。

この本は吉田健作さんと増蔵さんというみやこ町出身の兄弟が、どんな人生を送ってきたかということについて漫画で書かれています。昔のことが書かれています。絶対にくつかったと思えます。それでも、あきらめないで一生懸命に取り組んでいたところがすごいと思えます。私だったら、すぐにあきらめていたと思います。吉田健作さんは、国のため、人々のためにというのを常に考えていたから、努力し続けることができたんだと思います。自分のことよりも、周りの人のことを大切にしている姿勢にあらがれます。

明治十九年十一月二十一日、健作さんが三十五歳のとき、今までがんばった成果が形として現れる日がやってきました。ずっと作りたかった工場がついに日本に完成したのです。この工場は、西洋文化を象徴するレンガ作りの巨大煙突が天をつく、滋賀県最大規模をほこるものでした。この工場をきっかけに全国各地にもたくさん工場が造られていくことになりました。健作さんにとってこれほどうれしかったことはなかつたと思います。しかし、健作さんは持病のぜん息の悪化もあり、四十五歳という若さで生涯を閉じることになります。短い人生だったと思いますが、健作さんのたくましく生きる姿は、とてもかっこいいと思います。健作さんの生けん命な姿は、弟の増蔵さんにも大きな力を与えていたのではないかと思います。

健作さんの弟、吉田増蔵さんもみやこ町の偉人としてとても有名です。増蔵さんは「昭和」という日本の元号を

考えた人です。漢文や漢詩を生けん命学んでいた増蔵さんはある時、森鷗外先生から声をかけられ、一緒に元号を考えたいという依頼を受けることになりました。しかし、道半ばで森鷗外先生は体調をくずし、ずっと寝たきりになってしまいました。このまま元号を考えたいのは難しいという空気がたたく中で、増蔵さんは

「元号は元号を作つてみせます。」と、宣言します。この言葉を開いて森鷗外先生は、どんなに心強かつたことだろうと思えます。元号を考えるという仕事をしている中、増蔵さんにはもう一つの依頼がとびこんで来ます。それは「天皇陛下の称号を考案してくれないか」というものでした。どちらも大変な作業です。それでも、増蔵さんは元号と称号どちらの仕事にも全力で取り組むという選んたことができたということが本当にすごいと思えます。私だったら、どっちも手付かずになったり、混乱してミスが出てしまつたりすると思います。こんなに重要な仕事を頼まれるということは、増蔵さんがたくさんの人たちから信頼されているからだと思います。健作さんと同じように増蔵さんも、自分のことだけでなく、周りの人々のためや国のために自分ができることを生けん命やりとげたというところが兄弟で似ていると思いました。

みやこ町出身の偉人、吉田健作さんと増蔵さんについて書かれた「吉田兄弟物語」。この本を読む前は、毎日快適に暮らしていることは、当たり前のことだと思つていました。でも、この本を読んだ後は、決して当たり前のことではなく、周りで支えてくれている人がたくさんいるからだと思うようになりました。そして、私自身もだれかを支えることができようかなんかになりたと思うようになりました。「吉田兄弟物語」は、そんなきっかけを私に作ってくれました。みやこ町に住んでいる人だけでなく、たくさんの方に読んでほしい、おすすめの本です。ぜひ、みなさんも読んでみてください。